

日本産フクロウハジラミ属の分類学的再検討

環境資源学専攻 生物生態・体系学講座 昆虫体系学 島田 潤

1. はじめに

フクロウハジラミ属 *Strigiphilus* は咀嚼目ホソツノハジラミ亜目チョウカクハジラミ科に属する昆虫である。名前の通りフクロウ類全般に寄生しており、他の鳥類からの記録はない。これまでに全世界で40種以上が記載されている。日本では内田清之助によって4種が記録されて以降、50年以上研究がなされていない (Uchida, 1948, Uchida, 1949)。内田の研究では、交尾器等重要な分類形質の比較・記載が行われていない。そこで本研究では内田標本の再調査も含め、日本産の本属の再調査を行った。

2. 方法

内田コレクションは液浸標本の状態で保存されていたが、標本の中には液体が気化して完全に乾燥してしまっているものも含まれていた。そこで内田の標本は一度80%エタノールに戻してからプレパラートを作成した。

内田コレクションの他、鶴見コレクション・岩見コレクション (山階鳥類研究所) を借用して本研究に用いた。

観察には生物顕微鏡 Zeiss Axiophot と共焦点レーザー顕微鏡 Leica TCS SP5 を用いた。

3. 結果と考察

内田コレクションの再調査の結果、内田が *Philoaterus rostratus* (*Strigiphilus rostratus*) として記録した標本は誤同定であり、未記載種であることが明らかとなった。さらに内田が *P. cursor* var *laticephalus* (*Strigiphilus laticephalus*) として記載した標本には二種が含まれており、キュウシュウフクロウから得られた標本は *S. heterogenitalis* Emerson & Elbei, 1957 と同定され、モリフクロウから得られた標本は *S. cursor* (Burm., 1838) と同種であることが明らかとなった。モリフクロウから得られた *S. laticephalus* の1個体をレクトタイプ指定することで、本種を *S. cursor* のジュニアシノニムとし、また *S. heterogenitalis* を有効名として残した。また、新たにフクロウ類から得られたサンプルを調査した結果、日本で今までハジラミの記録がなかったコノハズク、シロフクロウ、アオバズク、リュウキュウオオコノハズクからのハジラミを入手し、*S. tuleskovi* Balát, 1958, *S. ceblebrachys* (Denny, 1842), *S. heterogenitalis* を記録した。今までフクロウから *S. heterogenitalis* が、コノハズクから *S. tuleskovi* が得られた記録はなく、新しい宿主の記録となった。一方、シマフクロウの標本調査ではフクロウハジラミは得られなかった。

4. まとめ

フクロウハジラミ属は系統的に離れたフクロウから複数記録されている種を含む。このことからフクロウハジラミ属の中には宿主転換を行っている種がいると考えられる。しかし移動能力の低いシラミが宿主転換を行うのは容易なことではない。どのような方法により宿主転換を行っているのかを明らかにするために更なる研究が望まれる。